

ニ梅津三郎兵衛と申者江戸より罷下申候  
 一御米置場御普請御急被遊正月半未ヨリ御取立同二月半時分ニ不殘出來仕候其節  
 御普請奉行三浦七右衛門様細井松兵衛様御徒目付山場彦右衛門殿被仰付候御奉  
 行禰津孫四郎様最前ヨリ御詰被成候其已後御普請奉行中村七兵衛様御越被成候  
 一右御普請中松平藤兵衛様御見廻被遊候  
 一御普請一日之出人足千二三百人宛出申候  
 一子二月廿四日最上御城米初而酒田へ着船仕候御米置場へ野積仕候  
 一御城米御馳走として御火之廻山口傳右衛門様栗田傳右衛門様同日ヨリ御廻被成  
 候  
 一子四月八日川村瑞賢並倅傳十郎父子共九左衛門方へ致下着候半途迄御町奉行内  
 町米屋町共頭取役人迎ニ罷出候瑞賢駕ヨリ下リ一禮被致着之後御町奉行中臺式  
 右衛門様三浦七右衛門様細井松兵衛様仙場秀右衛門様何も御上下付御見舞被成  
 候  
 一子五月二日御城米初出船仕候ニ付瑞賢方へ館野權吉様御使者ニ御出被成候  
 一瑞賢父子共五月十日酒田發足江戸へ罷登申候  
 一御城米御直廻被成候ニ付寛文十三年丑二月江戸表ヨリ御觸書別紙寫差上候

一御城米川下し被仰付候ニ付延寶二年寅三月三日江戸表ヨリ御觸書別紙寫差上候  
 一延寶六年午四月廿三日二木九左衛門跡役寺島伊右衛門申上候節之書付寫別紙差  
 上申候其以後代リ役之者拙者共吟味仕申上候  
 右之通去御方被留置書拔申上候  
 (享保十年)

巳十二月

鑑谷惣左衛門  
 加賀屋圓次郎  
 上林七郎左衛門

御尋ニ付申上候  
○但朱書ニ御料代官之尋にて  
 浦役人差上候答書トアリ

一羽州村山郡最上御代官所御年貢米酒田湊え川下仕江戸へ相廻候儀往古ヨリ御坐候  
 ニ付何年已前と申義不奉存候へ共御直廻已前ハ正木彌三兵衛と申者海上請合を  
 以江戸へ運送仕最上ヨリ川下之御米ハ酒田町藏へ入置申候ニ付藏敷米等從公儀  
 被下置候由及承候  
 一町藏ニ御米有之候而ハ出火之氣遣も御坐候由にて寛文十二子年川村瑞賢老酒田  
 へ下リ被申町はなれ三丁程下濱之方へ場處を被見立御圍ハ酒井左衛門尉様へ御普請  
 被仰付翌年ヨリ正木彌三兵衛請米相止御直廻罷成候由瑞賢老□□酒田湊ニ御



城米浦役人被立置候而可然哉與御窺之上江戸ヨリ被仰付二木九左衛門二木與兵衛と申者兩人浦役人被仰付候壹人ニ五人扶持宛被下置今以相續被立置相勤申候一羽州田川郡丸岡御料ハ其頃迄左衛門尉様御預リニ而則左衛門尉様より船積御役人酒田へ御下し置被遊候由御米ハ御直廻ニ御坐候由同郡大山領ハ酒井備中守様御知行所ニ而御坐候處四十年程以前備中守様御遠行以後小野朝之允様御支配所ニ罷成其後ハ丸岡大山領勿論最上領共ニ諸星庄兵衛様小野朝之允様御代官所ニ罷成候由

一田川郡御私領米ハ酒井宮内大輔様御入部以來大山廻米相始リ江戸ハ其比廻米無御坐候右左衛門尉様御代より江戸大坂共ニ御廻米御座候様及承申候

右者今度御尋被成候へとも往古之義體ニも不奉存有増承傳之趣書付を以申上候以上

享保三年戊九月

小幡嘉兵衛  
寺島彦助

寒河江 柘植兵大夫様  
長 秋山彦大夫様  
漆山

神保甚三郎様

(酒田町三組古控)御城米御圍地 御城米古來ヨリ町藏入請負ニ而船廻相成寛文八年由利九岡御城米ノ江戸廻リ正木半右衛門與申者御請負勤中最上御城米も何比ヨリ歟同人請負仕居候處寛文十一亥年御城米直廻し被仰付翌十二年正月十八日御城米野積可仕場處檢分いたし廿五日ハ御普請御取掛二月廿四日迄人足三萬三百九十八人御郡中ハ出し申候川村瑞賢並傳十郎下着御普請出來申候

大山酒肆某日記 承露盤所收 寛文十二年子上様御城米ハ江戸町人川村すいけんと申者請取御直廻しの手本ニ仕候すいけん親子共ニ三月酒田へ下リ廿日斗罷在候て四月下旬に北國通罷登申候上下五十六人爰元通り申候

(酒井家御土藏記録寫) 覺

一大坂ニ而船やとひ申儀百石ニ付金十七兩程宛外ニ肝煎之者ニ銀四五十目程宛被下候ハバ手代之者共差遣申ニ不及相調可申由瑞賢申候

下ニ下ケ札 瑞賢船やとひ下し申筈ニ被仰付候

一長州下關瀬戸内ニ案内船當年差置爲廻船之宜候由ニ御坐候間領主毛利甲斐守殿へ被仰渡彼案内船出候様ニ可被仰付哉と瑞賢申候委細此段口上ニ可申上候

上へ附紙 是ハ案内船瑞賢時之こく被仰付候ハ、金子百兩程も被下候ハ、末



々迄助成を以勤可罷成由ニ御坐候領主へ被仰渡可申候右百兩之内六十  
五兩ハ瑞賢書付之内余リ金相渡し三十五兩今度被下候積リ 下札案内  
船之義被仰付候筈

一志州鳥羽領之内ニ當年かゝり火たかせ廻船のため宜候由ニ御坐候間領主内藤飛  
彈守殿へ可被仰渡哉と瑞賢申候委細口上ニ可申上候

上へ附紙 是ハ廻船のために候間かゝり火たき候様ニ領主へ被仰渡可申候但金

子貳百兩程只今被下領主へ御渡し被成候ハ、未々迄けたいなく相勤可

申様ニ瑞賢申候併かゝり火たき候者ニ御扶持方被下薪等之入用可被下

哉之事

下ケ札

かゝり火之儀ニ被仰付候筈

一秋田ヨリ江戸迄之浦邊ニ役人差置候事御止被成御城米船破損並捨テ米等御坐候  
時分領主ヨリ相斗被申付候趣口上書ニ被成被仰渡候ハ、可然様奉存候趣瑞賢申候

下ケ札 酒田ヨリ江戸迄浦邊役人なしに領主江口上書被仰付候筈

一御城米船から船ニ而破損仕候へハ酒田ニ而船數不足仕候間餘慶船可被遣候哉左  
候ハ、百石ニ付金貳歩程ハ入用相増可申候但舟過不足之分者凡三四千表程ニ而  
可有御坐候間船積リ次第ニ御米高可被仰付候哉右兩様御意次第ニ可仕候事

下ケ札 餘慶なしに船被仰付候筈

一酒田ニ而御城米用人處之者貳人程福島並ニ五人扶持宛被下役人仕立置可然由瑞  
賢申候

上ニ附紙

最上ヨリ酒田迄川舟ニ而御米送届酒田ニて廻船ニ積申場處ニ御座  
候間役人差置御米並舟積舟積已下相改万用爲相調申候國領半口口  
處之用人申付候ハ方々ニ指置候故人數七人ニ而一人ニ五人扶持宛  
被下候酒田ニてハ人數ハ二人被仰付一人ニ五人扶持ヲ被下候様ニ  
仕度奉存候

下ケ札 酒田役人二人被仰付候

一船印之事

下ケ札 船印被仰付候筈ニ候

一廻船之者へ相渡候糧米其外少々先達而相調候ものに御座候事

下ケ札 糧米めかき所ニて相調申筈

子十一月八日

松平清兵衛

佐野平兵衛

請取申金子之事

本ノマ、

合金七百四十二兩壹分三朱也 此銀拾分三分

右者羽州由利丸岡御料亥ノ御城米三千九百四十七石一斗四升七合子之歳江戸相



廻候運賃並諸色爲御入用請取則銘々相拂御勘定仕上ケ無出入相濟申候爲後日仍如件

寬文十二年子十一月十一日

川村瑞賢印

多田所左衛門殿  
酒依長兵衛殿  
小林金右衛門殿

前書之通由利九岡御料者ノ御年貢廻米運賃方御入用之儀依御差圖御相談之上被仰付無相違相納候ニ付右之御金御渡し可然奉存候以上

酒井左衛門尉内

辻加賀右衛門印  
天野一郎右衛門印

表書之金七百四十二兩壹分三朱可被相渡候斷者本文之通有之候以上

主馬印  
五兵衛印  
喜右衛門印  
内藏允印  
病氣猪右衛門

由利九岡御領子之御年貢米覺

一米高四千貳百壹石五斗壹升六合

外

一欠米貳百貳拾七石壹斗八合九勺

右之欠米石最上儀三斗七升入壹表ニ付貳升ツノ積リ

二口合四千四百貳拾八石六斗貳升四合九勺

右之外極月六尺給米拾四五石御割付入申筈ニ候

右之御米來年江戸廻ニ御坐候間此分之船上方ニ而御頼酒田ニ御下し可被申候以上

十一月廿一日

辻加賀右衛門  
天野一郎右衛門

川村瑞賢老

覺

一酒田ニて役人二木九左衛門同與兵衛此兩人御城米付萬事御用達候様ニ被仰付候

由松平清兵衛殿佐野平兵衛殿被仰候就夫來丑之正月朔日ヨリ同極月晦日迄壹人

ニ五人扶持宛從公義被下候間可被仰渡候

一酒田ニて御米下積仕候めかき之義少御言葉被加所之相場ニ賣候様ニ被仰付御尤

ニ候由清兵衛殿被仰候

一酒田飛鳥ニ御付置被成候御家中之衆右之衆御付置不被成候ても由利九岡御役人

衆三人其外同處之手代衆も大勢御付置飛鳥ニも定役人御付置被成候へバ外ニ御



家中衆御付置被成候ニ及申間敷由清兵衛殿被仰候  
 一廻船之者ニ相渡し候糧米所ノ相場ニ相調申事  
 一船之儀ハ瑞賢方へ被仰付上方ヨリ酒田へ下し申筈ニ御坐候右之船酒田へ入船以後清兵衛殿平兵衛殿此方御城米船積之事  
 一御城米諸事御入用之儀ハ酒田ヨリ浦々江戸迄御預リ所之分ハ面々ニ致以來御勘定も面々ニ仕上可然之由清兵衛殿被仰候  
 一浦々之書付瑞賢中通ニ相濟申候則書付壹通差越申候  
 一金拾壹兩貳分銀貳匁六分四厘亥之年由利分欠米不足百姓方ヨリ出ス分  
 一金三兩銀拾貳匁八分四厘九匁欠米残り金百姓方へ返ス分  
 但此返リ金由利欠米不足金へ濟し外ニ八兩壹分銀三匁八分者戌ノ御年貢正木半兵衛江戸廻し能州にて破損濡米代金ニ而由利欠米不足金へ相濟し申候間早々油利百姓方ヨリ欠米不足金御受取此方へ八兩壹步銀三匁八分來春可被遣候濡米代金之内へ入置申度候同三兩拾貳匁八分四厘九匁欠米残り金百姓方へ御渡し可被成候委細者大津八右衛門被存候覺可有之候  
 一由利九岡亥之御年貢米三千九百四十七石壹斗四升七合子ノ年江戸へ相廻し候運賃並諸色爲御入用金子七百四十貳兩壹分拾匁三分御証文ニ而公儀御金奉行衆ヨリ

請所瑞賢方へ相渡し候証文之寫一通

一由利九岡子之御年貢廻米御勘定相濟大帳小帳十一月十九日ニ手前へ請取申候重而帳寫差越可申候  
 一由利九岡子之御年貢並欠米外六尺給米御割付次第船積ニ付瑞賢方へ右高書出候寫一通差越申候荏大豆者如例年地拂之筈ニ御坐候  
 一由利九岡子之御城米積立申候臺木並萱柴とも瑞賢致候様ニ二木九左衛門同與兵衛兩人ニ御相談御調可被成候少も當春瑞賢致候ニ不相替可被成候御入用金銀者公義御金にて御調候筈  
 一延澤大山御領も右同斷定而松平清兵衛殿方二木九左衛門同與兵衛方へ可被仰付候手代衆來ル正月中ニ下着可有之候間能々萬事可被仰合候  
 一漆山右同斷  
 一來年由利九岡廻シ米上方ニ而船雇申候前貸之金路金萬爲御入用從公義御金三百兩受取瑞賢方へ相渡し申候是ハかり御証文ニ而御座候以上  
 一子ノ十一月廿五日  
 辻 加賀右衛門  
 天野 一郎右衛門



一羽州漆山延澤大山丸岡油利御領米爲御城米江戸御藏に相廻候儀向後酒井左衛門尉松平清兵衛佐野平兵衛ニ被仰付申候間兼而被仰付候趣堅相守申不作法無之様ニ入念可被申付候自然風波之節ハ浦邊之者早速出合御城米船不破損様ニ御米不濡勿論紛失無之様ニ精を入へし附浦役有之湊たりといふ共御城米船之義ニ候不可口総而何方ヨリ相廻候御城米たりとも難風又ハ船破損之節ハ精を入候様ニ可被申付候事

一御城米船之儀ニ付不依何事用處出來候歟又ハ船破損有之節ハ兼而浦場え被仰付候御條目之通並今度船中に相渡候五ヶ條寫之差遣候間其趣を以萬端可被申付候事  
 一御城米船若遭難風海中に御米捨之候ハハ隨分取揚之於其處入札を以御爲宜様ニ取計代金之儀ハ江戸に相届御勘定所よりの差圖を以何方へ成共可被相渡候附船中にて濡候御城米之分ハたとひ大濡たりといふ共爲干候て不濡俵ニしめり不移様ニ仕江戸へ可積届之旨船頭へ可被申付候勿論船破損或捨米或濡米有之ニおるては見分之趣委細浦手形ニ書載之船頭ニ渡之上乗船頭水主等迄銘々遂穿鑿口書いたさせ浦手形ニ繼添表ニ押切いたし印形如前々可差越右口上之内風雨之模様  
 其外申口ニあやしき義又ハ相違之事在之候ハ、其子細浦手形ニ可書載之浦手形を以証據ニ立來候間不念之義ニ歟自然上乘船頭水主等ニ被頼其處之者僞申義有

之候ハ、後日ニ相聞候共急度穿鑿可有之候間能々入念有体ニ可致沙汰之又破損船修覆可成体ニ候哉不及繕候哉其段をも浦手形ニ具ニ可書載事  
 一御城米船於諸浦米にて賣買物從跡々如被觸可爲停止若猥之義於有之者早速御勘定所迄可致注進事

一御城米船出船より江戸着迄自今以後者白地之四半ニ大成朱丸有之船印立置候様  
 一ニ申觸候間若船印違候歟又ハ印不立御城米船有之候ハ、誰之御代官所之御城米船頭誰と承届穿鑿之節有体ニ可申上候事  
 右之通可申遣之旨御老中依御差圖如此候以上

寛文十三年丑二月

德 五 兵 衛 判  
 甲斐 喜右衛門 判  
 杉 内 藏 允 判  
 病氣松 伊右衛門

此証文浦々郷次ニ江戸迄先々無滯可被差越候

酒田より江戸迄

浦々御領私領中

船中え相渡艫之間ニ張付置候覺書

一於船中御城米無沙汰ニ仕間敷候万一打米澤午欠米等ニ准之御米少にても取隠候



ハ、後日ニ聞といふ共穿鑿之上船頭水主之儀ハ不及申品ニより諸親類迄可被行  
罪科事 附 船中火之用心堅相守之且又諸勝負仕間敷事

一 御城米船積之砌楫柱綱碇並糶米薪諸道具等ニ至迄海中にて可入分不殘積立舟足  
改を請候以後何れ之浦にても私之荷物隠候て不可積候若日和無之致永逗留糶米  
不足之時ハ何れ之浦ニおゐても相調其趣所之者ヨリ証文可取之自然偽糶米ニ准  
之商賣之米調於積之者急度曲事可申付事

一 遭難風打米仕候て不叶時ハ糶米不殘捨之其上にて御城米捨可申若自分之穀類等  
殘置候ハ、可召上之事

一 澤午米有之候者入念可于之 附 海中にて舟具打捨於令不足者着船之湊に可相調候  
事

一 於江戸御城米不相渡以前糶米之余分斷あくして陸へ揚申間敷事  
右之條々儘ニ相守可申若相背之族有之におゐては訴人ニ出へし縦同類たりといふ  
とも其罪を許御褒美可被下候あをなす候様ニ可被仰付候自然隱置側より相聞候  
ハ、船頭ハ勿論水主かしきに至迄悉可被行罪科者也

寛文十三丑二月日

覺

一 御城米相廻候時送狀ニ御城米員數之義ハ不及申糶米並船頭水主何人乗何年造之  
舟有増之船道具舟足俵口合紋等可書付御城米之外少物成とも積合之荷物一切停  
止可被申付候

一 日和待鹽掛り之浦々にて送狀披見之上滞留之子細帳ニ注置候様ニと浦々へ申觸  
候ニ付其旨可被申渡候惣而俵物ニ而賣買物仕間敷由堅可被申付候

一 上乘ニ差越候輩者食議之上儘成者可乗之舟足かろく仕度存少之風をも大成難風  
之様子ニ船頭水主等迄上乘に申掠俵物勿捨候事可有之少成共疑敷儀有之候而俵  
物勿捨候者穿鑿之上上乘船頭水主等迄曲事ニ可申付候間能々可被入念事

一 惣而舟足入過候ニ付難風之時分惡敷之由其間有之間能々可有吟味八寸足宜敷由  
ニ候間左候者舟足八寸多不入様ニ可被申付候雖然綱碇船ヨリおろし舟足極候  
てハ無詮候間綱碇以下船ニのせ其上にて舟足可相極勿論改ニ遣候手代等と誓詞  
申付正路ニ致沙汰候様ニ可被申付事

一 御城米舟印之儀布にて成共木綿にて成共白き四半ニ大成朱の丸を付其脇ニ面々  
苗字名書付之出船ヨリ江戸着まで立置候様ニ可被申付候諸浦へも其通申觸候間  
自然舟印違候敷又ハ舟印不立置舟有之候者浦々ヨリ注進申來候筈ニ候條不相違  
様ニ可被申付候事



右之通念ヲ入被申付不届之儀無之様尤ニ候以上

寛文十三丑二月

德 五 兵 衛 印  
甲斐喜右衛門印  
杉 内 藏 允 印  
病氣松猪右衛門印

從來酒田湊ノ航路ハ主トシテ北海ニアリテ東西ノ聯絡ハ未タ全ク通セサリシガ  
川村ノ計畫セル御城米直輸ト共ニ其航路公ケニ開通セラレ爾後酒田湊ハ有名ノ  
諸港ト氣脉相通スルヲ得コ、ニ庄内酒田ノ名ハ廣ク海内ニ著ハレ頗ル其地位ヲ  
高メタリ

(承露盤) 覺

- 一御城米西海江戶廻四ヶ所浦役人
- 長州下ノ關 小倉屋藤右衛門 志州蛙乘<sup>アノリ</sup>三橋安右衛門 勢州口口 中西彦右衛門
- 紀州田奈免<sup>タナベ</sup> 南三十郎 右之四人御扶持米壹人ニ五人扶持之積羽州御城米之内ヨ  
リ海船壹艘ニ五七俵ツ江戶へ積廻申候古來ヨリ此通御坐候
- 一同東海廻處々浦役
- 奥州小湊 大澤兵三郎 同寒澤 内海嘉兵衛 同荒濱 武者庄右衛門 同相馬東金 佐藤十右衛門

岩城小名濱 能代與一右衛門 常州平瀉 鈴木主水 同中ノ湊 梅原藤七 総州銚子 大野兵助  
房州内浦 渡邊彌一右衛門 以上九人

(浦役人)  
小幡嘉兵衛  
富樫伊兵衛

享保十年巳十一月

要スルニ川村ノ案出セシ直輸ノ方法ハ本ト幕府ノ爲メニ計畫スル所ナレバ直接  
其利益トナリシモノ極メテ多カリシナランモ我カ庄内ニ於テハ保護監督上非常  
ノ手數ヲ要シ動モスレバ士民ノ累ヲナセシモノ亦少カラズ然ル酒田港ノ航路ハ  
之レヨリシテ東西ニ開ケ數多ノ海客ニ其名ヲ謠ハレ海運漸次擴張シ大坂馬關等  
ノ商況ハ呼應ノ間ニ知了セラレ爲メニ商業ノ發達ヲ促カシタルノミナラズ艇舩  
ニ倚リテ生活スル細民亦其恩澤ヲ被リシハ爭フヘカラサルノ事實ナリ換言スレ  
バ川村ハ古來久シク鎖サレタル海門ヲ開キ酒田ノ爲メニ莫大ノ利源ヲ與ヘシモ  
ノニシテ既往二百年間町民ノ享ケタル利益ハ皆其賜ナリ嗚呼其功績ハ永ク没ス  
ヘカラズ



御米置場ノ酒田ニ於ケル利害ノ關係ハ既ニ斯クノ如ク大ナリ而モ其位置ハ最上川ノ末流ニ枕ミ銚子口ニ瀕スルヲ以テ河身ノ變迂ニ依リ毎ニ川欠ノ憂ヘアリ明和四年三月廿七日ノ雪融洪水ニハ既ニ柵際マテ崩壞シ漸次柵内ヲ掠メ危殆將ニ測ラレサラントス町奉行金井男四郎狀ヲ具シ急ヲ訴フ藩主大ニ驚キ有司ヲ特派シ實地ヲ檢分シ應急ノ工事ヲ設計セシムルニ頗ル大事ニ属シ容易ク成功ノ見込ナシ因テ之ヲ本間久四郎後チ四郎三郎ト改名スニ諮詢ス久四郎爲メニ水利ニ地勢トヲ考ヘ方法ヲ計畫シ圖案ヲ附シ之ヲ藩主ニ上リシガ其方案幕府ノ採用スル所トナリ同五年六月廿二日御普請惣御用掛ヲ命セラレ拮据經營之ヲ竣功セリ事本間家ノ下ニ詳カナリ但川村ガ規畫セル直輸ノ方法ハ維新ノ際マテ實行セラレシガ明治年石代上納ノ制トナリシヨリ自ラ廢止ニ属セリ

富士權現址 今町外レ舊平田境二ノ杭三ノ杭ノ間ニアリ龍嚴寺藏西濱繪圖但此圖ハ享保元文間ニ成レルモノナリ

其地ヲ富士山ト字セリ酒田町三組古控 木之花開邪姫命ヲ祭ル出羽風土畧記 創祀詳カナラズ古老ノ口碑ニ酒田港ノ鎮守ニシテ古ハ規模頗ル大ニ龍嚴寺之レカ別當職タリ其山

號ヲ酒田山ト稱スルモ當社ニ因メルモノト山王宮々附修驗舊記ニ飽海郡酒田ノ鎮守ハ富士權現ナリ其比田川郡酒田ノ鎮守ヲモ遷シ奉リ云々

ト見エ所謂田川郡酒田ノ鎮守ハ今ノ縣社日枝神社ヲ云ヘルモノナレバ古老ノ傳誦モ亦誣ユヘキニアラズ更ニ酒田山王宮ノ事歴ヲ案スルニ上山王宮ハ上杉時代マテハ東禪寺城鎮守ニシテ城内ニアリシヲ慶長六年東禪寺分町家内町組米屋町組守護ノ爲メ今ノ山王堂町ニ迂サレ後チ近江町ニ移轉セシモノ又下山王宮ハ田川郡向酒田ノ町民移住ノ際當社境内ニ遷座アリシヲ同年酒田町組鎮守トシテ上荒町ニ遷サレシヲ寛永二年更ニ當社境内ト大神宮山トノ間ニ移轉セルモノナリシコト既ニ縣社ノ下ニ述フルカ如シサレバ慶長六年以前ニ於ケル當社ハ酒田湊ノ鎮守トシテ社殿ノ規模モ亦尋常ナラズ故ニ羽源記ニモ

上 略 一手ハ酒田の町口に柵を結廻らし櫓をアゲヘイサマ上塀矢狭間を拵へ高野の濱を左に見て富士の社を脇になし濱地に陣を堅めける

トアリ此レ慶長六年四月志田川村ノ兩將東禪寺籠城ノ際酒田町口今ノ今町外レ



ニ於ケル防禦ノ部署ヲ記セルモノニシテ當時若シ社頭ノ規模些少ノ禿倉ナラシ  
 ノハ斯ル場合ニハ耳目ニ上ラサルヘキニ「富士の社を脇になし」ト云ヘレバ規模  
 稍々大ニ夙ニ人目ヲ惹カレタリシヲ想見スルト同時ニ今ノ下山王宮ハ其附近ニ  
 アルニ拘ハラス之ヲ記セサレバ當時微々タル社頭ナリシヲ知り得ヘキナリ即チ  
 不動院書上文政二年ニ

酒田御町鎮守山王宮往古砂山藤ヶ森與申所ニ有之尤小社ニ而在之其後由來有之由  
 ニ而御町方鎮守與奉仰候

ト云ヘルハ其實ヲ傳ヘタルモノナリ此役吹浦口破レ敵兵ノ爲メニ追跡セラレ且  
 戰ヒ且退キ終ニ城中ニ入りシカバ當時兵燹ニ罹リシナルヘク尋テ庄内悉ク最上  
 氏ノ所管トナリ志村伊豆守東禪寺城主トシテ川北ヲ領スルニ及ヒ戰後殘破セル  
 酒田ヲ經營スルノ際下山王宮ノ由緒ヲ糺シ之ヲ下荒町ニ移シ酒田町ノ鎮守タラ  
 シノ漸次盛大ニ趣クニ隨ヒ當社次第ニ衰微セルモノナルヘシ  
 然ルコトニ挿入セル享保元文頃ノ高野濱繪圖ヲ案スルニ尙東西三十間南北三十

五間ノ境内ヲ有シ當年ノ名殘ヲ存セシモ爾後愈々衰へ寶歷ノ比ハ既ニ神体ヲ龍  
 嚴寺内ニ安置セラレ寶曆以下風土畧記ニ據ル舊址ハ風砂ノ爲メニ平地トナリ今ヤ其形跡サヘ  
 見ルヘカラサルニ至レリ

(羽源記第九卷龍嚴寺新緣起所引)酒田の濱富士權現の社と申すハ弘法大師の開基にして其比  
 湯殿山爲開闢御來臨の節と見えたり何時比にや酒田寺町眞言宗龍嚴寺へ引移し今  
 に御富士の御神と申諸人尊敬す酒田陣の遙か後迄御富士の神とて砂濱ムカヒアハセに向  
 の山ニツあり今ハ年々に砂吹寄せ山の形も平地となりけるよし

當社ト下山王宮トノ關係ハ斯クノ如キヲ以テ古來下山王宮ニ於テハ重キヲ當社  
 ニ措キ彼社重大ノ儀式ニハ必ス之ニ與カリ延享元年瓦葺及ヒ明和天明ノ迂宮ニ  
 係ル作法次第ヲ閱スルニ導師法式中ニ南無山王大權現南無富士大權現ト稱名ス  
 ルヲ通例トナスノミナラズ就中天明度ノ迂宮式ニハ舊例ニ仍リ神輿假小屋ニ富  
 士權現龍神ヲモ勸請セラレタリ此等ハ當社ノ酒田湊舊鎮守タリシ緣故ニ因ミ殊  
 ニ崇敬スルモノニシテ即チ當初ノ故實ヲ失ハサリシナリ



酒田湊

附袖之浦最上川ノ下流海ニ注ク處南北ノ洲渚左右ヨリ斗出シ其狀宛

モ双袖ヲ翻ヘスニ似タリ故ニ古ヘ袖之浦ト稱ス風景絶佳夙ニ古人ノ吟咏ニ上リ

出羽ノ一勝區トシテ其名既ニ海内ニ著ハル

夫 木 今ハたゞ戀わすれ貝たえはてゞひかたも知らぬ袖の浦か那 平時定朝屋

同 旅衣たちよる磯の松かけにすゞしくかよふそてのうら風 讀人不知

新古今 浪にたにぬれすほすまはありそ海の釣するあまの袖の浦風 正三位忠定

拾 遺 君こふる涙のかゝる袖のうらいはほなりとも朽ぞしぬへき 讀人不知

新勅撰 うしと思ふものからぬる袖のうら左り右りに浪や立らん 俊成郷

同 君こふる涙は海となりぬれとみるめはからぬ袖のうらかせ 藤原道憲

續後撰 袖の浦の湊入ぬのみをつくしくちすや猶もうき名立らん 祝部成茂

續拾遺 なけかじな袖のうら波たちかへりおもへは憂もちきりありけり 常磐井入道

小町家集 我身こそ心にしらて袖の浦ひる時もあくあはれなるかな

西行山 忍ひねの涙にたゞよふ袖の浦にあつますやとる秋の夜の月

家集 わすれ貝ひろふとすれと立歸り又かけそふる袖のうらなみ 季吟

名所百首 みなと女や蜃を化粧そてのうら 三千風

名所發句集 袖の浦酒田



名所百首 わすれ貝ひろふとすれと立歸り又かけそふる袖のうらなみ季  
 吟  
 名所發句集  
 袖の浦酒田  
 みなと女や螢を化粧そてのうら  
 三千風

善蔵  
 彌兵衛

二ノ粒  
 今町口  
 二ノ粒

能登真屋道

御船場

基町



渡場

北

三十四町  
 面置谷  
 地才吉

御順見道

草頭畑

古

能登真野村

獵船場

原圖龍巖寺所蔵(縮寫)

西



御船蔵





熱水

あつき日を海に入たりもかみかは

芭

蕉

續後撰集ナル祝部成茂カ「袖の浦」の湊入江の滞ミナツクシ標ノ咏セラレタル港口ハ分明  
 ナラズ現今ノ位置ハ高野濱ノ西十余町許ニアリテ大湊又銚子口ト字セリ大港ハ  
 日光川ノ小湊ニ對シ銚子口ハ港口狹ク港内廣クシテ銚子ノ口ニ似タルヲ以之レ  
 ニ名ケラレタルモノナリ而モ港口ハ最上川ノ末流ヲ承ケ河身ノ變遷ニ依リ位置  
 淺深一ナラズ往時最上川ノ流レ青原寺裏ヨリ酒田城大手前近ク酒田町川岸八町  
 ナ掠メ今ノ船場町地方流底タリシ比ハ宮之浦人家ノ軒下ニ銚子口アリシト云ヘ  
 リ最上川ノ下高野濱附近ニ古水戸ト字スル處アルハ即チ此際ノ港跡ナルヘシ寬  
フルミト  
 永年中廣野谷地ニ新川ヲ開鑿シ本川ノ流勢ヲ飯盛山下ニ導キシヨリ形勢一變シ  
 河流漸次南ニ移リ北方ニ起上地ヲ生シ以テ今日ニ至レルモノナリオキアケチ  
 酒田港ニ於ケル航路ノ創始ハ自然ノ作用ヨリシテ既ニ上代ヨリ開ケツ、アリシ  
 ナランモ文献ノ徵スベキナシ文祿二年十月十二日上杉景勝ヨリ東禪寺城主甘粕  
 景繼ニ下セル文書ニ坂田町年貢船共ニ嚴重ニ可令算用者也トアル船役ハ船舶



ノ口錢ニシテ永田氏文書ニ所謂駒口錢モ亦異稱同質ノモノナリト云フ是非ヲ知  
ラス最上時代ニ京都ノ吳服商島屋五郎左工門ナルモノ山形ニ滞在中酒田ニ來リ  
米百俵ヲ申請ケ山形藏屋敷ニ役所ヲ立テ船舶ノ役錢ヲ取扱ヒ島屋歸京ノ後酒  
田町年寄其跡ヲ襲ヒ之ヲ繼續シタリト以テ當時已ニ海運ノ發達セシヲ見ルヘシ  
(山形屋  
數ノ下)

今度最上御藏屋敷御尋ニ付申上候

一山形御藏屋敷之義者出羽守様御代島屋五郎左工門と申京の者にて出羽守様吳服  
屋仕候由御當地へ罷越御米百俵申受沖口入役錢相改申候宿ハ三ノ丁松田又左工  
門所ニ罷在右藏地に番所を立沖ノ口相守申候

一島屋五郎左工門京都へ罷歸候後酒田町年寄三人ニ而右御米百表申請其後役儀相  
守申候  
内町久敷者共

貞享二年丑十二月

齋藤與右工門殿  
伊東彌左工門殿

與兵工 新兵工 九郎右工門  
七十八歳 八十四歳  
與次右工門 清右工門 利右衛門

然氏寛永十一年遊佐大肝煎高橋太郎左工門ノ訴訟目安ヲ案スルニ當時庄内ノ米

價ハ主トシテ越前敦賀直段ヲ標準トナセシモノ、如ク見ユレバ酒田港ノ名ハ未  
タ東西ノ海客ニ知ラル、ニ至ラズ其之ヲ知ラレタルハ盡酒井家入部以後ノ事ナ  
ルヘシ

備考

(野附氏書留) 達三様

藩祖酒井忠  
勝ノ法名

之御時代大坂表大和屋何某之船漂泊之砌當

湊ニ漸ク入船いたし初而御米賣買御願申上候處宮ノ浦人取次ニ而直ニ御上に申上  
御米千八百表壹表ニ付七百八百文位被仰付船積いたし候處荒風ニ逢ヒ濡米六百表  
位出申候趣歎願ニ付早速御取替被下置難有出船致候之後大坂ニ而評判いたし當湊  
入船之儀追々に開け候其節五千兩位之金子所持いたし御米願下し候是ハ賑々敷相  
成申候右大和屋何某當湊ニおゐて御口錢永代御免しニ相成候よし相聞申候

其後漸次他邦ニ知ラレ船舶ノ入津スルモノ頗ル多カリシ而モ港口ハ最上川ノ流  
勢ニ依リ深淺一ナラズ動モスレバ危險ノ憂アルヲ以テ寛文七年「みを教」即チ水  
先案内ヲ創始シ海客ニ便宜ヲ與ヘタリ

(鶏助編) 寛文七年三月八日酒田御町問屋共船持共獵師と相談之上川口みを教船獵  
船貳艘相備置入船ハ賃錢申受度旨願出候ニ付申付らる

覺

一酒田川口にみを教船獵船貳艘置申沖ヨリ船馳掛參申候者右之船貳艘之内壹艘ハ



沖に乘出しみを何尺立申候由教可申候又沖ヨリ引船乞申候者貳艘の内壹艘ハ酒田宿に其段爲知可申候

一日暮船馳掛參申候者右みを教ヨリ火をたき案内知せ可申候

一みを筋にうけ<sup>浮</sup>四處ニ付置可申候川口ニ小屋かけ晝夜とも無油斷入念可申候

一海船ヨリみを教船代物繼申儀者十五人乗ヨリ上ハ代物貳百文宛七人乗ヨリ十四人乗迄ハ代物百文宛五人乗六人乗ヨリハ代物五十文宛繼申筈ニ相定申候

右之通當御町問屋共船持共獵師と相談仕リ御訴訟申上候處叶難有仕合ニ奉存候爲其如件

寛文七年未三月八日

御奉行所

上林重三郎  
加賀や與助  
鏡屋惣左工門

同十二年川村瑞賢幕府ノ租米直輸ノ方法ヲ實行シ東西諸港ヘノ航路ヲ開通セラレシヨリ海運上ニ非常ノ發達ヲ促カシ天和ノ比ハ船舶入津スルモノ年々二千五百乃至三千隨テ問屋ヲ營業トスルモノ各繫榮ヲ極メ就中鏡谷ハ頗ル盛大ニシテ元祿中井原西鶴其光景ヲ記シ之ヲ四方ニ鼓吹セリ事或ハ卑猥ニ涉ルノ嫌ヒナキ

ニアラサルモ正ニ是レ酒田湊繁昌ノ現象トシテ觀ルベキモノナリ

(天和三年巡見使御用覺書)

一酒田湊ヨリ入津仕候廻船惣而諸國之船入出仕候共上方ヨリ商賣物取分多參候物

播摩鹽大坂堺伊勢ヨリ木綿類出雲ヨリ鉄美濃ヨリ茶南部津輕秋田ヨリ材木松前

ヨリ干物之魚最上ヨリ大豆其外雜穀ニ而御坐候並和泉讚岐加賀越前越後ヨリも

船參リ候

一同湊に入船春ヨリ九月朔日迄船數二千五百五十艘余入津仕候年により三千艘余

茂參候但乘水手船壹艘ニ十六七人ヨリ三四人乗込

一商買物酒田ヨリ上方へ多買出し候者庄内米最上米大豆迄ニ御坐候

而シテ船役即チ湊口錢ノ金額及徴収方法詳カナラズ寶永五年堺屋七右工門大坂屋九右工門ノ二人共同シ年々二千五百兩ヲ上納シ酒田加茂其他ヨリ出入ノ貨物價格銀百匁ニ付四匁宛ノ役銀ヲ徴収センコトヲ請願シ既ニ許可セラレシモ酒田鶴岡加茂ノ問屋等更ニ出願スル所アリテ事行ハレズシテ止ミ又是レ實ニ役錢請負出願ノ始メナリ



(野附氏御用留)寶永五年子五月酒田加茂並六口ノ御關所ヨリ出入ノ商荷物ヨリ銀百匁ニ四匁宛御役銀申請度と於江戸御願申上候堺屋七右工門大坂屋九右工門と申者兩人願之通被仰付候由ニ而同人兩人酒田へ下依之酒田鶴岡加茂惣問屋共ヨリ申上候ハ貳千五百兩ノ御役銀ニ而御運上被仰付候由左候ハ、右三ヶ處惣問屋共ヨリ右貳千五百兩差上可申候間御運上赦免被成下度旨申上候へハ則松平武右工門様上田頼母様ヨリ江戸へ被仰遣候由同六月十五日ニ江戸ヨリ相止候由ニテ同十八日ニ右御兩人様御狀山田四郎右工門殿へ參運上相止町々へ申渡候

享保八年近江町眞垣彌次兵工ナルモノ入船ノ貨物價百兩ニ對シ賣主ヨリ金三步買方ヨリ三步ツ、ヲ徵シ安全ニ船舶ヲ瀨取ラシムルノ方法ヲ案出シ之ヲ藩廳ニ建議ス藩主其議ヲ採用シ彌次兵工ヲシテ之ヲ掌ラシム其役所ヲ瀨取方ト稱ス瀨取トハ貨物ヲ別船ニ移シ載セ船舶ノ吃水ヲ淺クシ無事入津セシムルノ謂ナリ

(増口錢之義御尋覺書

文化三年永田治右工門書上

享保八癸卯年酒田御町近江町マガキ彌次兵工と

申者願出賣買之品代金百兩ニ付賣人より三分買人より三步ハ壹兩貳步ツ、取立方願上其節御直役と相聞え候其砌右彌次兵工申立候ニハ最上表ハ酒田湊へ積下り候御城米海船ニ積入右船酒田湊出帆之節九浮相成不申候ゆへ川船幾艘も差出海船之米川船へ積寫し元船水戸深ミに乘落し其後川船之米を右元船に又積寫し出帆仕候

浪風出候へハ時々難も有之ニ依而右彌次兵工申立ニ而獵船數拵ひ置海船出帆之節大獵船ニ積送候へハ假令少々浪風荒く候ニ而も危く無之様いたし瀨取仕候仍而瀨取方役所と申唱候

元文五年更ニ酒田町齋藤半内ニ取立方ヲ命セラル當時其役所ヲ過口錢方ト稱シ上納金平均二千兩内外ナリシト云フ

(同上)元文五年酒田御町齋藤半内ニ取立方被仰付候其節モ御直役彌次兵工申立候通ニテ賣買口錢ハ壹兩貳步ニ取立年中上納金高千七八百兩ヨリ二千二百兩迄有之候由其年ニ依リ不同モ有之候へ共大數平均二千兩位ト相聞エ申候其比ハ瀨取方ト不申過口錢ト申唱候由半内咄シニ而承傳候

(野附氏御用留)元文三年午二月過口錢取立役齋藤半内へ被仰付候而拾人扶持並刀御免被仰付候御看藏御役人高野之濱御役人大濱御役人其外手代共上リ申候鑑谷惣右工門玉屋久右工門モ被召上候御米置場前下川原御ふしんも前巳年ヨリ半内へ被仰付候米七表宛年々被下置候

寶曆元年鶴岡町人奥井長兵工金二千兩錢二百五十ハ文ヲ上納シ受負取立ヲ請願シ聽サル是レ受負ノ始ナリ同三年眞垣彌次兵工更ニ又五割掛元一倍即チ賣



買口錢合テ三兩三步取立方法ヲ案出セラル是レヨリ増口錢ト改稱シ上納年額  
四千兩錢二百五十ノ文トナレリ是歲間屋方貨物賣買口錢及ヒ藏敷庭銀等ノ規  
則ヲ定メラル

(増口錢之義御尋覺書) 寶曆元年鶴岡與井長兵工願出金高ハ二千兩ト錢貳百五十  
ノ文ニ而諸懸物不殘長兵工指出シ本納之處二千兩ト錢ニ而貳百五十ノ文御請負被  
仰付候是ハ請負之始りと相見え候右ニ而三ヶ年斗相勤申候處其後彌次兵工御益道  
之工夫致別段申上候

是迄取立百兩ニ付賣買壹兩貳步之處ハ五割掛元一倍と申義願上候右壹兩貳步へ五  
割を掛三步に成ル貳兩壹步元之壹兩貳步倍にいたし候ル金參兩參歩に相成候當時  
之取立半壹兩八十七分五厘兩口錢參兩參分ハ與井長兵衛方相始リ候其比ヨリ増口  
錢と申名相唱候様承傳え候

(酒泉古控 佐竹氏所藏) 賣買口錢定

一御米札並大豆金百兩ニ付 賣口錢金壹兩  
買口錢金壹兩貳步

但鶴ヶ岡加茂浦ニテ相調候分ハ買入口錢ノ内金貳步  
鶴ヶ岡御米宿並加茂宿へ遣ハシ候

一諸御大名様方先納 買口錢右同斷

一最上米並大豆小豆小麥金百兩ニ付 賣買口錢右同斷

一胡麻種蕎麥其外雜穀金百兩ニ付 買口錢貳兩  
壹兩貳步

一大麥荏粕こぬか金百兩ニ付 賣買口錢共ニ三兩

一吳服木綿古手繰綿真綿細もの藥種ノ類蠟漆鉛銅鹽 買口錢貳兩  
壹兩貳分

一金壹兩ニ付 賣買共口錢四兩

一たばこ、茶、紙、油、酒、酢、醬油、五十集物、笠類、打綿、疊表、瀬戸物、苧類、苧安、  
塗物、砂糖、石炭、いこ草、鐵鯨、鹽引、右類金百兩ニ付 買口錢參兩  
壹兩貳分

一千鰯並簀干鰯共金百兩ニ付 賣買共口錢四兩

一材木竹挽金百兩ニ付 賣買共口錢四兩

藏敷之定

一諸方御大名様御米並商人米穀雜穀共 百兩ニ付壹表

一胡麻荏種類此外吸入升目不同ノ雜穀ハ代金百兩ニ付壹兩

一紅花青苧壹駄ニ付 文銀永壹匁六分五厘也

一たばこ蠟半紙六束入伊勢茶村上茶壹本ニ付 同永壹匁也

一木綿古手繰綿並貳ノ目入櫃荷笠荷銅鉛輪竹壹丸酒油壹樽四斗入



美濃茶打綿壹函ニ付

同永壹分六厘也

一造鹽貳拾五目入壹表

同永四分九厘五毛也

一同拾五目入

同永貳分四厘七毛也

一同濱並鹽壹石ニ付

同永四分九厘五毛也

一細もの櫃類壹箇ニ付

同永壹分三分也

一中荷四ツ壹箇

同永九分貳厘也

一小荷六ツ壹箇

同五分也

一細々荷壹ツ

同永三分三厘也

一船手積下リ荷物其外切ニ買仕切候ハ、藏敷取問敷候其節拂殘預置候諸荷物ハ定法之藏敷取可申候

右之藏敷定法之通年越候ハ、兩年分引取可申事

庭之定

一俵物届賃共積高百表ニ付

壹俵宛

但金運賃ニ而モ積高壹分ノ積ニテ引取可申候

一敦賀爲登俵物運賃高之内壹割引取可申候事

一金運賃ノ物ハ何方へ爲登候共運賃金ノ内ヨリ壹割引取可申候

一積荷酒手届物大表壹表貳文ツ、小表壹石壹文宛駄もの壹駄ニ付六文宛たばこ壹函ニ付貳文宛此分銅鉛共ニ同様也

船宿片銀之定左之通

一穀物届壹石ニ付

文銀永四分九厘五毛

一紅花青苧壹駄ニ付

同永九分九厘

一ばたこ銅壹箇

同永貳分四厘四毛

一材木才廻米壹石ニ付

七十才ニ而  
壹石也

同永三分三厘

一千いわし拾表ニ付

同永三分三厘

右積庭之事何方ニ而船雇下送狀ニ差出不申定有之候共此方定通引取可申候扱又此方船賃いたし候ハ、船宿右定之通船方ヨリ片銀取可申候又爰元より他湊へ船賃遣候ハ船借主ノ宿片銀取可申候

輕荷片銀定

一木綿古手線綿櫃荷油四斗入藍玉疊表此類壹箇ニ付 文銀永三分

一傘伊勢茶美濃茶此類 永貳分

此外小荷ノ分右ニ准目積を以片銀取可申候尤輕荷積下候  
船頭ヨリ船宿取可申候



右之通前々定法ニ候處不同之筋有之様相聞候ニ付此度古法之通書改相渡候間堅相  
守可申候若相背候ハ、御役所へ御斷申上相定候通問屋家業取上可申候以上

室曆三年酉二月

西野長兵工  
玉屋久右工門

奥井ガ請負ノ結果良シカラズ毎ニ上納金額ニ不足ヲ生シ損毛ヲ引負フニ至シカ  
ハ更ニ貨物ニ増役ヲ課シ之ヲ庭銀ト稱シ其収納五百兩ト豫算シ之ヲ本納ニ加ヘ  
年額四千五百兩錢二百五十文ノ上納ヲ請願シ聽サル然ルニ問屋等ハ庭銀ノ増  
課ヲ以テ酒田湊ノ衰微ヲ促カスモノトナシ痛ク之ニ反對シ結局庭銀ヲ廢シ奥井  
ノ上納額ヲ以テ問屋方ニ於テ受負フコト、ナレリ爾後或ハ直接取立トナリ或ハ  
受負トナリ納額ニ多少ノ異同アリキ事ノ顛末「増口錢之御尋覺書」ニ詳カナル  
モコ、ニ省略ス要スルニ入津ノ貨物ニ對スル賣買口錢ノ徵収ハ眞垣彌次兵工ノ  
發端ニ係リ藩經濟ニ一大財源ヲ開キタルモノニシテ其功勞少カラサルヲ以テ室  
曆九年ニ至リ之ヲ追賞シ二代彌次兵工二年金拾兩ヲ永賜セラレタリ

(野附氏御用留) 室曆九年

被下金請取申事

一金拾兩

小判

右者親彌次兵工儀先年冲瀨取船爲御入用増口錢御取立之儀發端仕申上候處今以御  
取立被仰付六年已前成年<sup>○室曆四年迄</sup>三十貳年冲瀨取方御用拙者相勤來リ候處今度御爲  
道之儀ニ付右瀨取御用酒田御町川船方へ被仰付候親彌次兵工舊功ニ付此末年々可  
被下置旨被仰付難有仕合ニ奉存候相渡候様御未書可被成下候以上

卯十二月

越中屋彌次兵工  
野附圓太

御町奉行所

安政五年四月廿一日箱館奉行支配組頭河津三郎太<sup>名ハ祐邦幕末ノ名士</sup>蝦夷海產物交易御用

ノ爲メ下向ノ途越後新潟ヨリ來酒シ當港ノ形勢及ヒ輸出入物ヲ調査セラル之ニ  
係ル文書左ノ如シ

(同上) 安政五年午年

河津様御下役神保殿今暮方無御滯鼠々關村御着相成申候御膳濟比合等見合六ツ半  
時頃ニも可有御坐哉御伺申上候處早速御遇被成下御次之間へ罷出候處壹通リ御挨拶



撈之上御同間へ入候様強而被仰候間罷出候處御領分中御附添等之儀余リ御入念之事ニ有之今度海岸見分ト申候而モ差付之事ニも無之其場合其向ニ寄下役忠左衛門を以其處問屋等之旨ヲ爲尋候ニテ差添御坐候共別ニ御尋之義も無之余リ御手厚之事ニ候旨被仰候……尋方之儀ハ同人下役ク條書も用意いたし居候筈既其處之產物ト暇夷地產物ト交易方之義ニ有之當御領分ハ大山酒ハ兼而松前箱館邊へ相廻候筈夫等ト酒田湊位之儀ニ有之右ハ忠左衛門へ打合せ各取調取扱ト申ニ無之右箇條ヲ以其處へ相廻置罷越候前方取調置候様被取計候義ハ手數も無之夫丈果敢取候條兼而忠左衛門へも申談置候ニ付爲打合候様被仰候夫ヨリ寅年御下リ等ノ御嘶モ有之引取申候

一忠左衛門殿へ罷越段々對話仕候處近年御用船追々御出來夫々御役人乘込稽古旁是迄も貳艘トカ東廻リ乘廻し候由此後も追々乘廻し候義ニ付自然難風等之節用意之爲手筈ト湊深風模樣等承置候ニ有之扱又暇夷地產物ト兼テ湊々ヨリ相廻候品々ト多分石數相斗リ暇夷地產物積船之歸リニ何々積戻リト申様ニ交易之便利いたし候様トノ御趣意ニ有之專ラ此節江戸大坂兵庫三ヶ處へ會所相立取行候義ニ有之追々ニハ湊々之便利ニ相成候様ニトノ御趣意ニ有之三郎太郎儀ハ右掛リ被仰付居候ニ付海岸筋其所々ノモノヨリ相尋候義ニ有之其筋役向等ニ沙汰いたし取調ト

相成候而ハ事おつこうに相成候間直ニ相尋候事ニ伺濟相成居候ニ付其御心得ニテ御合迄ニ御渡可申候間其向之者へ御廻し置候而取調置罷越候節差出候ハ夫ヲ以テ取調候様可致旨被申開候大山酒等之儀ハ明日大山泊之上利右衛門等へ永續いたし候様可仕奉存候得共酒田之義ハ成丈早速御廻し相成凡調酒田御泊迄半紙帳ニいたし用意之儀傳大夫様酒田町奉行迄被仰遣相成候様仕度専ら問屋頭杯取扱モノト奉存候湊淺深川筋等之儀ハ寅年モ書出し候様覺居申候去秋中カ最上御代官所ヨリ酒田へ申來候書取扱と凡似寄候モノト奉存候大凡ニモ不分不知ト申事にてハ治り申間敷哉と奉存候何分可然様被仰上御取計可被下候以上

四月十九日夜九時頃出ス

(網役) 菊池文藏

石井助三郎様

森繁之助様

覺

但川附ハ川附承知いたし度候  
一湊 淺深何百石迄之船何艘程碇泊相成候哉但何向ニテ何風キラヒ候哉箱館迄海上何里有之候哉

此御答 酒田湊ヨリ最上村山郡船町河岸迄川路六十二里程夫ヨリ川上幾里と申



儀辨不申候右船町上ハ小川ニテ酒田川船通相成不申候淺深之義ハ當時六尺五寸位御坐候へ共時々相變候義御坐候而確差定候義無御坐候海船川口之義ハ千二三百石ヨリ百石以下迄大小取合凡百七十艘位碇滯船繫留罷成申候當港ハ亥戌之方ニ向申候海船入津滯船中ハ午未之風難儀仕候松前箱館迄海上里數百二三拾里位同所城下迄百貳拾里位同江差迄百拾里位御坐候蝦夷地產物 鱒鮪鱈鯉其外共一ケ年何程位凡入津相成候哉但何品多分ニ取捌候哉石數承知致度候

此御答 松前產物多取扱候分ハ鱒ニ御坐候其外荷品別紙凡取調申上候一箱館松前江差へ是迄何品積送リ候哉但凡石數何程ニ候哉

此御答 積出し穀物其外トモ別紙凡取調申上候

一蝦夷地產物取扱候間雇何人程有之候哉名前承知致度候但船方ハ口錢何程宛受用致し來候哉外ニ濱役共外懸物有之候哉

此御答 問屋名前別紙ヲ以申上候

船方ハ請取候湊口錢其外濱役壹匁壹分八厘七毛五拂並諸掛リ共都合百兩ニ付五兩貳分貳朱位罷成申候

右之通取調差上申候處如斯御座候以上

午四月

覺

問屋

- 一生鱒四十七萬四百廿疋位
  - 一身欠七百貳拾本位
  - 一數子百七十五本位
  - 一秋味三萬七千三百四十四本位
  - 一棒鱒貳百五十九束位
  - 一鹽鱒五萬三千七百九十本位
  - 一心太草貳本位
  - 一花折昆布貳千四百三十把
  - 一早前同四百九九位
  - 一サスカイ昆布貳百五十把位
  - 一魚油貳百三十樽位
  - 一早割千束位
  - 一外割千三百九十束位
  - 一鹽引貳萬三千六百九十本位
  - 一筋子貳百八十七樽位
  - 一鱒千壹萬七千九百四十位
  - 一同鱒貳萬六千貳百本
  - 一細若和布三千四百八十貫匁位
  - 一駄昆布六百四十四丸位
  - 一胴結同五百四十六丸位
  - 一袋海苔八十本位
  - 一同小貳拾六樽位
  - 一江差同百三十三丸位
  - 一松前鯨小壹樽位
- 右ハ去巳年中松前產物取扱候分凡取調如此ニ御座候以上

午四月

覺

問屋



一 庄内米壹万貳百六拾表位

一新庄米貳千八百三十表位

一 最上米貳千貳百表位

一 白米五千六百表位

一 繩四萬千八百五十九位

一 酒九百四十八樽

右者去巳年中松前表へ積下リ候分凡取調如此ニ御座候以上

午 四月

問 屋

覺

藤屋 傳之丞 本間屋長三郎

小山屋 八右工門 齋藤屋 八三郎

山口屋 三六

右之通松前產物當時取扱候間屋名前如此ニ御座候以上

午 二月

問 屋

而モ幕府ノ計畫セル物産交易會社組織ノ形況ハ杳トシテ聞ユルナシ蓋是國事多  
 端ノ爲メ自ラ立消トナリシナルヘシ安政六年八月幕府ノ外國御用係脇坂中務少  
 輔ヨリ英船新潟港ニ回航ノ次當湊ニモ來泊スヘキノ通達アリ幕吏青山彌惣右工  
 門小山代助等北海岸筋御用掛トシテ新潟ニ下リ英船ノ着港ヲ俟チ滞在中即チ同  
 月廿九日庄内ニ移牒シ豫メ當港ノ深淺ヲ測量シ圖面ヲ調製セシム

但英船ハ九月廿六日飛島ヲ過キ新潟

ニ回航セシモ當湊ニ來泊ナカリキ

十一月四日青山等陸路來酒シ滞留四日海口ヲ調査シ更ニ測量圖ヲ  
 製セシメ同月九日歸途ニ上ル是時ニ當リ幕府新ニ海外諸國ト假條約ヲ訂結シ互  
 市場ヲ開始セントシテ著名ノ海口ヲ簡点セラレシガ當湊モ亦其候補地トナリ爲  
 メニ實查測量ヲ加ヘラレタルモノナリト云フ

(野附氏御用留) 安政六年外國御掛脇坂中務少輔様御達書之寫

追々英吉利船新瀉湊一覽として渡來いたし候節品に寄候ハ、其方領方出羽國酒田  
 湊に相廻候儀も可有之候間相越候ハ、右湊無指支一覽爲致候様可被取計候尤 公  
 儀役人之内乗組罷越候間可被得其意候事

以手紙致啓上候然者拙者共儀今般北海岸筋御用として新潟表へ罷越候處急速入用  
 之儀有之候間別紙之廉々御取調早々御答被御差越有之候様致度此段得貴意候以上

八月 廿九日

青山彌惣右工門  
小山代助

酒田表

酒井左工門尉様 御家來中

猶以未タ新潟表ハ異船渡來無之候へ共若し其地ハ相廻リ候儀も有之候ハ、海面船  
 附場ハ目印御差出し置有之候様致度存候以上



別紙寫明酒田表

- 一家數
  - 一諸國入津船數壹ヶ年凡
  - 一酒田城下其品最寄陣屋等何程
  - 一港内淺深巾廣狹
  - 一川外海面
  - 一他國相廻リ候品
  - 一新潟へ何程
  - 一海面落口淺深巾
  - 一土地之產物
  - 一佐渡へ何程
- 是ハ美濃紙三枚繼位之繪圖面ニ而御差越可被下候  
右之通 未八月

九月廿六日明六ッ時比戌亥之方ニ異船見へ新潟へ參候趣飛鳥表々七ッ時比御町奉行所へ御注進有之候ニ付廿七日ハ船頭水主相備候様申達ス尤異船新潟酒田へ廻リ候旨申聞候鈴木多七罷出候處明人與思敷唐人立居左ニ書爲見候由 此船是英利吉船公等可上此大船觀看

十月六日飛鳥貳番ノ注進御役所へ參リ異國船貳艘共九月廿六日七ッ時過越後方へ出帆いたし候旨申聞候早速御注進可申上候處荒天續ニ而渡海相成兼遲リ候旨被申聞候

十一月四日公義御役人青山彌惣右工門様初五人御出ニ相成ル同六日大濱湊ハ持地院御見分 同七日晝後市中御見分之積リ 同九日日出立

- 上林 青山彌惣右工門様 上下六人 御勘定吟味方改役
- 尾關 小山代助様 上下五人 御徒目付
- 佐竹 宮崎寛三郎様 上下二人
- 大口見歡六機 上下二人
- 中山七太郎様 上下二人

明治二年三月十三日酒田民政局湊口錢役所ヲ收メ同四月運上所ト改メ局員岡本鎌三郎ヲシテ之ヲ監督セシム 野附氏 御用留 同月賣買口錢三兩三步ヲ貳兩トナシ同二年

正月更ニ壹兩ヲ益シ其收入ヲ以テ湊修治及ヒ病院ノ費用ニ充テラレタリ

- (同上)
- 一今般口錢役所相改以來者運上所ト相唱可申候事
  - 一港稅錢之儀是迄賣買高金百兩ニ付金三兩三分取立來候處今般出格之御仁惠を以金百兩ニ付金貳兩之割合ヲ以申付候間月々無遲滯上納可致事
  - 一諸大名藏米拂代之義同様金百兩ニ付金貳兩宛ノ割合ヲ以上納可致事
  - 一伊達米澤最上邊へ上方筋ヨリ相廻候諸物又ハ右場處々々ヨリ上方ハ爲差登候諸物都而當處ニ而賣買不致品者金百兩ニ付壹兩之割合を以上納可致事



右之納之義者金札御布告之相場を以て納致候而も不苦專  
右之通問屋共は相達候間當市中未々迄可觸知者也

巳 四月

民政 局

年寄 大庄屋

問 屋 中

運上所税金之義去夏來百兩ニ貳兩之御規則ニ候處今度ヨリ金壹兩別段病院御取建  
川口直等ノ備として正月以後上納被仰付候條其向々ニ可相達者也

午 正月

酒田縣會計方

同年二月舊慣ニ仍リ水先案内船ヲ官費造作ヲ命セラレ同六月十日從來難破船湊  
普請備究民救恤金トシテ問屋方ニテ徵收セル五厘金ノ内救恤金ニ屬スルモノハ  
更ニ之ヲ酒田町雜用錢ニ組入ラシメ同年八月五厘金ノ徵收ヲ運上所ニ於テ之ヲ  
取扱ハシム

(野附氏御用留)

徳川家並舊領主御廻米積海船其外諸商船共當港出入之節水戸先深淺見定置爲案内  
水戸教船與唱小船貳艘舊領主ニ而造船右乗込人數壹艘ニ付六人都合十二人之内水

戸頭孫右工門久作三右工門と申者押立爲御給錢一人ニ付壹ク年錢貳ノ四百文宛是  
亦舊領主ヨリ數年來被下來尤給錢ハ聊之義ニ付商船ヨリ相對を以手當錢申受候由  
今般御料ニ相成候ニ付從上御造船被成下從來之通被御申付被下置候ハ、當港出入  
之諸海船難事にも不相成旅船安堵之一助にも相成可申且水戸教船乗組人一同相續  
罷成難有相心得可申與奉存候間本文奉願候通被仰付被成下度奉願候以上

午 六月 十九日

栗林新三郎  
須田稜藏

右願之通被聞置候事

口上之覺

問屋五厘金之義ハ當湊難破舟入用其外水戸御普請入用備並市中究民救助備として  
沖出之諸荷物代之内ヨリ百兩ニ付金貳分ヲ取立備置申度旨佐竹彌右工門山田太次  
右工門其外故年寄白崎五右工門之三人申合仕法組立候ニ付私共一同至極尤之儀與  
奉存其節之町奉行へ申立年々取立備置候得共究民救助之分別段ニ備置不申候而者  
規則も相立不申候ニ付其後町奉行右取立高之内貳步通り年々町雜用金之内へ備  
置候様被申付救助筋之分右之内ハ相拂候事ニ規則相立申候此段奉申上候以上

午 六月

大庄屋 野附七郎右工門  
栗林謹三郎



須田稜藏

五厘金之儀是迄問屋方ニ而取立諸事請拂等致來候得共爾來於運上所ニ取立相成候  
ニ付問屋方諸入用之節ハ其時々其向ニ通帳以申出可受取候事

但是迄取立候分取調明細帳相添可差出事

右之通問屋頭ニ相達候條爲心得申達候也

庚午八月十日

酒田縣

酒田町

寄大庄屋

明治四年四月大藏省船稅規則發布以後湊口錢廢止セラレ爾後漁船來泊スルニ及  
ヒ大小ノ和船漸次減少シ復タ昔日ノ光觀ナキモ明治八年ノ調査ニ據ルニ出入ノ  
漁船帆前船大小二千余ニシテ輸出品數四十六金額五十七万三千五百五十六圓三  
錢壹厘輸入品數九十余金額二十七万五千七十四圓三十九錢六厘ナリト云フ

飽海郡誌卷之四終

160  
10  
170



